

Title	ロイ・ハロッド 東銀調査部訳 ポンド・スターリング
Sub Title	
Author	白石, 孝
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1954
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.47, No.8 (1954. 8) ,p.854(66)- 855(67)
JaLC DOI	10.14991/001.19540801-0066
Abstract	
Notes	書評及び紹介
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19540801-0066">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19540801-0066</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

ている。

さて、紙数の関係で、同書の個々の主要論点についての検討はできなかったが、本書の論旨の出発点が「序論」にあると考  
えられるのでここでは個々の検討を割愛し、最後に本書に對す  
る二、三の質疑を述べておきたい。

先づ勞務管理の社會經濟的基礎についてであるが、これの歴  
史的な形成が獨占資本主義期における大企業のおかれた諸條件  
を基礎として、獨占資本家の經營實踐として形成されたとい  
ることについては十分に諒解することができるが、しかしそれ  
は「現代」勞務管理として規定することは出来ても、そのも  
つ歴史性は單に獨占資本主義期(現代の國家獨占資本期をも含  
めて)に限定されるものであるか。社會主義との關連に  
ついては全く考慮におかれる餘地はないのであろうか。第二  
に、勞務管理の本質を勞働力管理であるとされることは十分理  
解できるが、しかし「人間管理」が現實の問題とされていること  
の單なる歴史的階級的根據を究明し批判する計りでなく、むし  
る資本の勞働力管理自體が本來經營經濟の二重性の矛盾にもと  
づいて、自ら矛盾を形成し、その資本家的解決として謂ゆる  
「人間管理」を取り上げざるをえない必然性を孕んでいるので  
あつて、ただ問題はこの「人間管理」が人間性の解放、勞働者  
の人格化を眞に實現するものではなくて、資本主義的支配の  
新しい形態として似而非化されるという基本的制約(經營民主  
の本質との關連)をもつ「勞働者人格化」のための管理である  
と見ることが、そしてまたそれを具體的に論證することが、必要  
なのではあるまいか。(昭二九・一發行、泉文堂、二八〇圓、  
著者は明大教授)

ロイ・ハロッド 「ポンド・スターリング」  
東銀調査部譯

原書 The Pound Sterling が入つて来てから、既にこの内  
容の紹介は「世界經濟」で行われ、詳しく「東銀月報」(一九  
五三・一一二)に所載されていたが、昨秋、東京銀行調査部譯  
としてその貿易爲替シリーズ第二卷に加へられた。

實際のところ、ハロッドの近著 The Dollar, London, 1953.  
とくらべれば題名が對照的でもこれは全くエッセイ風の記述で  
あり、讀者をなつとくさせるに足る理論なり定見の説明が甚だ  
不親切であるが、英國經濟學者らしさがよくにじみ出ている  
點、興味ある著書といへよう。

まず世界通貨ポンドの回顧において、その最盛期のポンド政  
策の成功は、本質的に無制限交換性と無制限貸出とを内容とし、  
同時に現在も猶その主義によらない限り「満足すべき世界通貨は  
決して誕生しないであろう」と主張する。(一一八頁)これは  
直接には世界通貨としてのドルの資格審査の基礎でもあり、  
「自由企業の擁護者がこの主義に改宗しない限り、世界の自由  
企業は消滅し……遂には不愉快な双務的取引の結果として全體  
主義的體制とまでいかないまでも、それと同じ程に硬直化した  
體制の膝下に自ら屈してしまうのではなからうか」と不安の念  
を懷く。(七頁)かくてポンドやドルの世界を支へる根本條件  
の變化はこゝではさして彼の分析の對象にはならない。むし  
ろ、ドルへの不満が世界通貨の資格をそなはしめる政策的條件  
の缺除ということに焦中の表現されているとみて過言ではあ  
るまい。

ドルに對する不満はまた異つた視點から國際通貨基金に對し

てもみられる。即ち、彼がかつての爲替平衡勘定の機能を高く  
評價し、それが「短期の不均衡に對しては安定性を、長期不均  
衡の調整のためには伸縮性を確保する」ことを目的としたにも  
かかはらず、國際通貨基金はこの「原則を硬直化」してしま  
い、「魂のぬけた模寫にすぎない」と極論する。(一九一〇  
頁)しかれば彼は基金に一體なを具體的に求めようとするの  
か。これを本論文より判断することは全く困難に近い。伸縮爲  
替を念頭とする反論かどうかは讀者はうかがい得ないであら  
う。

本書の一・二節は前述の如きポンド政策の回顧よりの二つの  
不満に費され、愈々第二次大戦後のポンドそれ自身の問題に移  
される。勿論、誰しも現在のポンド問題の重要な部分として認  
めるのは「ポンド残高」のそれである。彼はこの處置に關する  
英國の政策が誤つていたことを痛烈に批判する。即ち「正しい  
決定は銀行組織からこれら残高の大部分を取除いてしまふこ  
と」であつたのに、これを行うを得なかつたことはポンドとして  
世界通貨の地位を再び獲得せしめる基本條件—交換性の回復を  
不成功ならしめ「頻々たる危機をも招來した」のであると。(二  
四—三九頁)彼は再々このポンド残高に對する外科的手術をな  
さなかつた一事を「不幸な事實」として嘆く。しかしまた一九  
四七年の交換性回復の不成功はかかる理由以外に、終戦  
後の客觀情勢よりする時期に多大な疑問があつてしかるべきで  
あらう。

彼は最後の二つの節で一九四九年のポンド切下並に再軍備イ  
ンフレーション期におけるポンド再建策に論及する。英國の平價  
切下の評價については、理論的にもまだ問題が残されているけ  
れども、彼の論評はこうである。即ち、國內インフレ時にまず國  
内デイス・インフレによる是正策をとるべきであり、これで對

書評及び紹介

外收支の悪化を是正出来ない場合乃至國內價格・生産構造が通  
貨の對外價值と全く乖離している場合のみ平價切下が是認さ  
るべきが原則でありながら、當時の事情は決してそうではな  
かつた。しかるに切下處置が採用されたため、第一に「輸出量  
の膨大にして不自然な増大をもたらした」第二にこれにともない「イ  
ギリスの製造能力に非常な重荷」を與へたにすぎず、「輸入量  
を抑制するなんらの力もたず」結局「最大の慘事」にしかた  
ぎなかつた。(六六頁)これは再軍備期の英國經濟にとつて  
當然な論評でもあらう。かくして、彼はデイス・インフレ政策  
を基幹としむしる平價引上(これは輸入入價格の低下にするイ  
ンフレ抑制効果をもつ。これに對しては Revolution of See  
ring, Financial Times, April 26, 1951)と既述の交換性  
回復を主張してやまない。これらの論點は現在著るしく事情を  
異にし、彼自身序文で修正をしている如く、實際上の提案には  
若干の加算並に訂正を必要とするもの、本書のもつ國際金融  
機構上の原理的主張の意義は依然興味あるものとして、また討  
議の對象としてあげられる價值があるであらう。就中デイス・  
インフレ政策の方法、平價變更については検討の餘地を残して  
いるようである。(拙稿「伸縮爲替相場と交易條件」本誌四六  
ノ一) B 六版九七頁 實業之日本社 昭和二八年十二月 二五  
〇圓 (白石 孝)

和田木 松太郎著

「豫算統制制度」

本書は豫算統制上の諸事項を殆ど網羅し、しかも實施上の個  
々の具體的指針が要領よく示されてあるので、現代の豫算統制  
制度を概観する上に、また此を初めて施行する企業に格好の書